

<書評>

On Translator Ethics

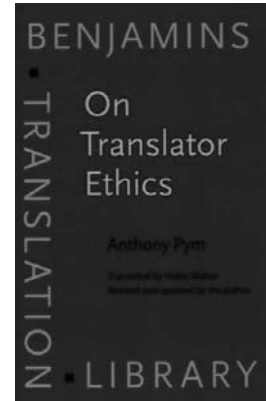
Anthony Pym

(John Benjamins 2012 年)

Pages: 185 pp.

ISBN 9789027224545

評者 鶴田知佳子(東京外国語大学)



アンソニー・ピムによるこの本は、翻訳について書かれた本としては2つの点で異例であるといえる。まず一般的にあって、翻訳について書かれた本はどのようなものが多いかという翻訳という行為について理論的な研究を行うものか、あるいは実践を行っている人であれば、どのように翻訳をするのか、(あるいは学生が常にいうようにどのようにしたら翻訳がうまくできるようになるのか) こつを教える、実践的な指南本が多いであろう。一般受けのする翻訳関係の本は、なんらかのコツを伝えるものであり、他方研究者の書いたものは学術関係者が主な読者であるように思われる。しかし、両方の種類の本はともに翻訳をどう行うのか、どうやって翻訳をするのかという *How to translate* の部分に関わっていることでは共通項がある。今回とりあげる本が異例なのは、ピムが問うているのは *how to translate* ではなく、*why translate* である点である。

もう一つ、異例なのは *why translate* に大いに関係ある点でもあるが「翻訳のコスト」に焦点をあてている点である。翻訳をすることの広い意味でのコストを正面からとりあげて翻訳をするべきか、問うているがその際にピムは経済学でいう「機会費用」の考えをとりいれている。特に注目すべきは、まず翻訳をするという選択をしたときから翻訳者には責任が発生するという点である。

この本の構成としては非常に丁寧に学術的な説から説き起こし、順番に説明していくかたちとなっている。なぜ翻訳をするのか? という問を投げかける序章にはじまり、第一章では *In-betweeners* (間にある人) としてシュライアマハーにはじまりヴェヌーティに至るまでの主だった主張を辿る。第二章 *Messengers* (使者) ではメッセージを携える者としての古代ペルシア王の元に使わされた *Sperthias* と *Bulis* の悲劇にはじまり、携えているメッセージへの責任は問われるべきではないとする。第三章

Professionals? 「専門職?」では、ゴフマンの枠組みを用いて翻訳者の役割を論じ、第四章 Interveners 「介入者」ではアリストテレスの四つの理由をもとに論じる。第五章 Missionaries 「伝道師」では翻訳者の在り方について論じてきた代表的論客の議論をふりかえり、第六章 Agents of cooperation 「協力の代理人」では交渉理論で用いられている model of cooperation をもとにさらに深く代表的論客の意見をなぞりながら翻訳者の役割を考察し、第七章 Principles for translator ethics 「翻訳者倫理の原則」を経て、今後は世代が交代して翻訳がさらに拡大すると予見する終章で締めくくられている。

本の途中にちりばめられている説明のための逸話や引用句も興味深い。たとえば、冒頭ではイタロ・カルビーノの「不在の騎士」からの描写で、戦闘の場でそれぞれの兵士が自分の出身地である部族のことばで相手を侮蔑するありとあらゆる罵詈雑言をあびせかけるが、それを通訳する通訳者の安全は保証されていた、というエピソード。敵意をかきたてる上では、味方の兵士が投げつけられていることばを理解したほうが奮戦するだろうというよみがあるのだろうが、翻訳の思わぬ効用である。第七章の冒頭に掲げられている通訳者とのあいだの個人メールでやりとりされた内容には通訳者としてひきこまれた。フランスの大統領が空港に到着したところで突如大雨、フランス大統領のおことばを待ち受ける人たちの前に上品な縁飾りのついた傘をさして待機していた女性通訳者が登場したとたん、大統領のお付が通訳者からエレガントな傘を「借りて」大統領夫人にさしかけ、通訳者は雨のなか濡れて困惑しながら必死にメモをとり通訳をしたというはなし。倫理感の強い通訳者であればいかなる悪条件でも仕事は完璧にやり遂げるものの、このようないわれのない苦労を強いられるべきではない。

第七章では、この逸話を受けて著者がこの本全体を通じて論じてきたなかから翻訳者(通訳者を含む)が心得るべき教訓が5つ引き出されている。1)翻訳を引き受けたときから翻訳についての責任がある、2)翻訳の与える影響について責任がある、3)翻訳の倫理は2つの文化のどちらかを選ばせるというものではない、4)翻訳にかかるコストが翻訳に得られる協調的な相互作用を上回ることがあってはならない、5)翻訳者は単なる使者以上であるため、自身の業績が長期にわたる安定的な異文化理解に貢献する力となることに責任をもつ。

著者が述懐しているように、翻訳すればするほど翻訳をするべきかどうか考えるということばには深いものがある。

以上のように、この本は今までの通例翻訳について書かれている本とは違う視点から、翻訳者(通訳者を含む)の心得として考えなくてはならない点を網羅している。

翻訳についての研究者あるいは実践を行っている者両方にぜひ、読んでもらいたい本である。

.....
【著者紹介】

鶴田知佳子（TSURUTA Chikako）東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。NHK衛星放送、CNN同時通訳者。会議通訳者。AIIC（国際会議通訳者協会）会員。

.....

